特別講演

後藤新平と公衆衛生

梅森健司

（水沢市立後藤新平記念館館長）

［はじめに］

「医者には三種類ある。下医は病人を治療し、中医は医者を治療し、上医は国家を治療する」医家としてスタートした後藤新平は、初め愛知病院の下医として患者を治療。後、内務省に入り中医として活躍し、医界の弊習を矯正することに努めた。それから上医となって、国家非常時の脈拍を検診するに至る。台湾や満鉄における経営をはじめ、鉄道院総裁としても、逓信・内務・外務各大臣においても、国家政策樹立百年の大ビジョン計画は後藤新平の一大モットーであった。

［挫折の中で知ったもの］

水沢に生を得た後藤新平の少年時代は、相当な腕白ぼうずだった。近くの子どもたちから「むほん人の子」とやじられたが、新平本人はその意味が理解できなかった。後藤家とは親戚関係にあった幕末の蘭学者高野長英のことから、一族は朝敵の汚名をきせられ、苦境にあった。それが少年新平にも罵声をあびせられた由縁である。

高野長英にはわが国最初の生理学書「医原枢要」がある。維新後、長英は日本の夜明けを開いた先人として絶大な評価を受け、新平も激しく気性を揺り動かされた。また、享保から安政にかけ水沢では五回の大火があり、さらには戊辰戦争の敗北と挫折、屈辱は、新平の気概を猛然と学問の道へ向かわせていった。

［医学修業・須賀川時代］

後藤新平の人間像を追及していくと、いくつかの卓越したアイデアが見出される。なかでも生涯を貫いた信念「科学的調査」に徹した事業は他に類をみないほどである。新平が魅せられた科学の力とは何か。

須賀川時代の終わり頃、医学校において初めて物理学、化学、解剖学、生理学の近代科学部門にぶつかった。全世界を根本的に変革した実験科学に、彼は火の出る勢いで勉強を始めた。決死的努力は、着物も袴もぬがず、寝床も敷かず机にふしたまま書見を続けた。この驚異的な学問の速力は数回にわたり試験に合格していく。

物理学は力学が中心で、ニュートンの力学がその基となっている。化学は有機学に結びつく。そして「科学」はこれまでに人々が思ってもみなかった自然の実態を次々と明らかにしていく成果があった。新平の科学的調査施行の根源となる。

［医学と衛生・名古屋病院時代］

愛知県立病院及び医学校の沿革は、明治 13 年 12 月。新平が院長兼学校長時代に編さんした資料は、後半彼の政治を不動のものとした。即ち、計画の「成廃得失」を明らかにし、既成の事実を葬らず「未完の方策」を追求し、将来の進路を定めるということにあった。「調査狂」とまでいわれた新平は、この頃から調査癖が意中にあった。

病院の教師には、オーストリアのドクトル・ローレッツや司馬凌海が教授していた。医学に名の知れた人物と新平の出会いは大きい。

○ローレッツ____新平は師ローレッツの元で臨床医学を学ぶ。西洋近代医学に触れるきっかけとなった。師は新平の資質を高く評価。新ウイーン学派の衛生思想を培い、新平もそれに応え生涯のバックボーンとなる。

○司馬凌海____語学の天才で日本初のドイツ語塾を開く。ドイツ語の辞書を編さん。オランダ語をはじめ五カ国語に精進。司馬はローレッツの訳官として愛知病院、医学校の基礎づくりに尽力。新平は司馬塾に住みこみ、語学を学ぶと同時に司馬の翻訳の口述筆記をする。このことが

新平の語学における知識を広め、司法医学や精神医学への関心を向けさせることとなった。

○石黒忠悳____日本医学界の柱石となり、日本軍医制度の創設に尽す。明治10年、西南戦争の時、博愛社（後の赤十字）を興す。大阪臨時病院長として傷病兵の治療に当たる。愛知病院に勤めていた新平は外科治療の実地研究を望み、石黒のもとに急ぐ。陸軍臨時病院で新平は一変する。名医と対等にメスを振い、石黒の指導により周囲が驚くほど技量は上達していった。

○長与専斎____明治６年、欧米の医学教育、衛生行政視察から帰国して文部省の医務局長に就任。長与の考察に「衛生」という新熟語が生れた。衛生局の歴史は長与の歴史でもある。新平が表した建白書「地方医学教育改正の意見」を目に留め、その健闘ぶりを評価。新平は長与の「懐力」ともいわれた。長与は新平を自分の後任に推薦。衛生局長後藤新平は伝染病研究所の設立などに手腕を振っていく。

［医学と衛生・衛生局時代］

明治16年１月、新平は内務省御用掛り、衛生局勤務となった。最初の大仕事は２ヶ月かけて新潟・長野・群馬３県の衛生視察であった。精細な質問表を作り周到な準備を重ね、医事衛生はもとより地理･尺度･物質･風俗などにも及んでいった。

●人間が棲息する以上、衛生の道は存在する。
●全国各地の衛生に関する事実を調査する。
●各地で風土が異なると衛生の法度も異なる。
●これらを理想に照らして利害を審定する。

後に、明治22年最初の著作「国家衛生原理」を刊行。

［医学と衛生・ドイツ留学］

明治23年４月､34歳で在官のまま宿願の実現、ドイツに留学。変則医学しか学ぶことができなかったコンプレックスの払拭でもあった。西洋文明の普遍性・先進性に強い感銘を受ける。特にドイツの衛生行政と社会政策の進歩に感嘆。明治25年１月、ドクトル試験に合格。

［医療・衛生・衛生局長時代］

明治25年６月、長与は新平に局長の座を与えた。留学中に得た医療や衛生に関する知識を独創的に反映させようと意気軒昂であった.西洋医学に支えられた公衆衛生等の事業に着手。北里柴三郎を中心とした伝染病研究所設立も重要な一つである。新平は生物学の原則に従って調査研究を重視する立場を貫き、本格的に実現へ転じていった。

［衛生の充実・台湾民政長官時代］

台湾は特に伝染病が多かった。ペスト・赤痢・黄熱病など国土病とまで称され、住民は30代にして病死する有様だった。上下水道の整備を重点とし、路上に流れる汚水廃棄として歩道と車道の整備改造を徹底した。また衛生政策では台湾医学校の設立（明治32年）に当たった。当時日本語教育もままならない頃であり、医学教育に世論の反対は大きかった.新平は強い信念をもって説得に当たった。成果を上げるまで数年を要した。

新平の台湾における政治的統治も大きい。アヘン政策がその一つ。日本本土ではアヘンの厳禁を強要したが、新平は漸禁政策をとった。世に言う「生物学の原理」が基である。この功績が最大の秘訣となりジュネーブ会議で高く評価された.。これも国の慣習を尊重する「台湾旧慣調査」によるものであり、後藤新平の名は世界に広がった。

◎「国家衛生原理」明治22年８月刊行

●基本となる考え方は、人は自然の一部である。
●その生存は、心や体の健全発達に満足な生活境遇、生理的円満を享有する目的である。
●国家とは人間の集合体である。国家も人そのものの機能を有している。国家それ自体一個の衛生団体である。衛生は人生の大もとである。

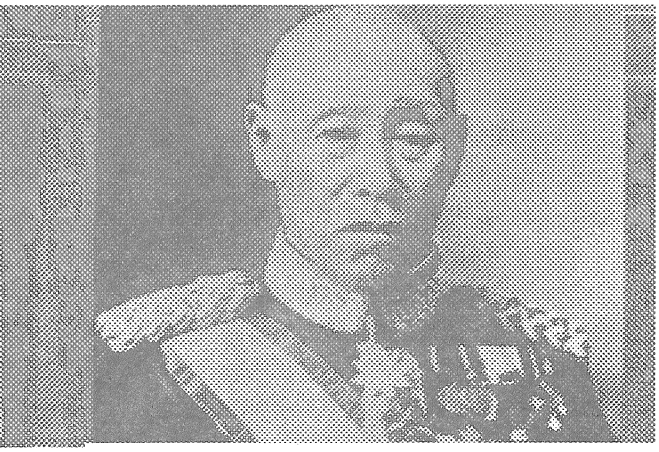
［おわりに］

後藤新平が生涯を終えたのは、岡山へ講演に行く途中の京都の病院であった。首相として内閣を組織することはなかったが、事業の計画に当たり常に徹底した調査を実行した。人間は生命を保ち国家も生命を保つ。人類が棲息する以上衛生の道は必ず存在する。これは新平が医学を学んだ衛生行政に従事し、単なる知識の習行に終わらず自分の頭で根源的に考えた人間観､国家観だといえる。これは政治家としても彼の生涯の信念であった。

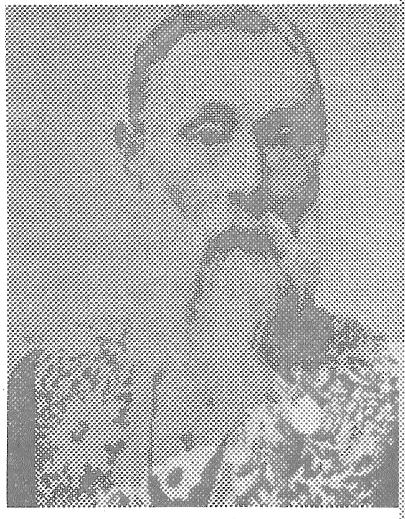
後藤新平　愛知医学校長兼病院長

ドクトル・ローレッツ

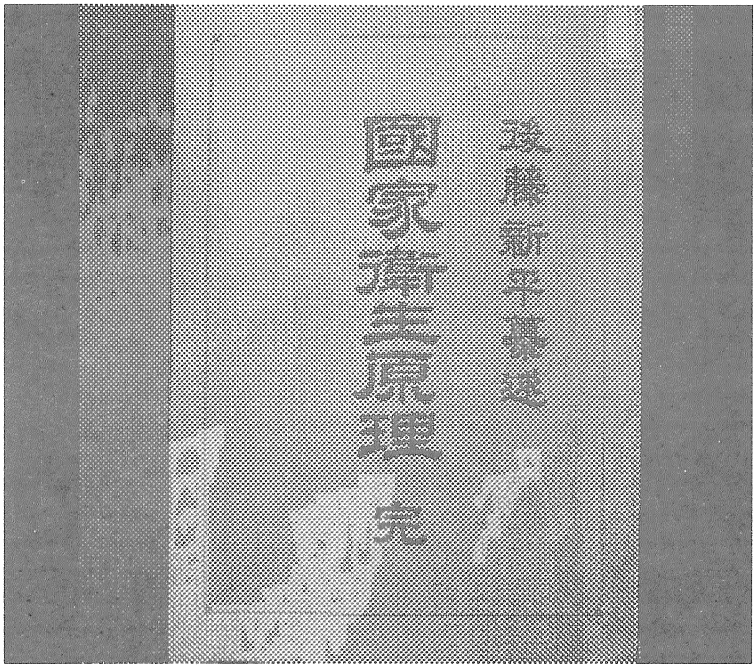
司馬凌海



石黒忠悳



長与専斎



左端　北里柴三郎、　右端　後藤新平

後藤新平（1857 - 1929）

水沢市立後藤新平記念館

〒023-0053　水沢市大手町４丁目１番地

電話・FAX（0197）25-7870

http://www.city.mizusawa.iwate.jp/shinpei/